ある時から変わった。。。。。

sakanasuk
i

ある時が来る前

彼の名前は、toshi。この時、彼は恋愛のことをよく知らなかった。そう、彼は小学生の時からクラスでは目立たないというだけでなく、クラスの隅にいた存在。けんかも弱く、小学生から中学生までいじめられていた。これも、すべてある時のための試練だったのかもしれない。もちろん、彼の高校卒業するまでの１８年間は、クラスでは、目立たず騒がず。地味に過ごしていた。普通に女の子に恋をしたが、成就することなくフラれていた。恋愛に対して、次第に奥手の控え目にマイナス成長していた。恋愛について考えることもなく、学校と家の往復に疑問を感じることなく生活していた。そして大学受験を迎えた。彼は、彼女がいなかったのである程度勉強をしていた。大学を受験することも行くことも当たり前のように考えていた。

ある時。

　ある、大学受験前の日曜日の朝、彼は母親に連れられて、コンタクトレンズを買いにいった。彼は、驚いていた。十数年間、メガネをかけていた時とは世界がリアルにかわったのである。素直に足元がよく見えることに感激していた。
９年間からのメガネ生活からコンタクトレンズへの変化が彼の生活を一変させることは、この時点では知る由もなかった。
　彼は、ある四月に晴れて大学生となり、一人暮らしをはじめることになった。新しい生活に夢をを抱き、希望をもって入学式を迎えた。彼は、高校時代剣道をしていたが、特に成績がよくなかったので何かサークルに入ろうとは思ってはいただが、こだわりは全くなかった。そんな軽い気持ちでクラブ紹介の会場に友だちがいなかったので、一人で座っていた。結構さみしいもので、女の子は男の子からとにかく集中的に勧誘を受けていただが、男一人で座っているとなかなか声をかけてもらえない。待つこと数十分。ついに声をかけてもらえた。しかも、女の子二人組（先輩ですが。）に、
「ねえねえ、入るサークル決めた？」
「まだ、ぜんせん。」
「どこ出身？」
「神戸」
「へえ～、なんか雰囲気が違うと思った。」
「なんで」
「なんか話しかけにくい雰囲気がした。」
「私、淡路出身。」
「うちのばあちゃんが淡路。」
「そうなん、一緒やん。」
「そうそう、私たち弓道部やねんけど。よかったら見学来ない？」
「いつ？」
「週末に」
「じゃあ、一度行ってみます。」
とありきたりの会話を交わしておわった。その後もやはり話しかけにくかったのか、声をかけられることはなかった。

流れで。

　彼は、他に誘われてもいなかったので、とりあえず週末に弓道部に見学にいった。
「あっ。来てくれたの？」
とこの間の女の先輩が声をかけてくれた。
「はい、一応ここしか声かけてくれなかったし。」
「そんなことないでしょ。」
「とりあえず、ここに名前書いて。これ見学者名簿やから入部ではないから。」
スラスラと書いた。
「えっ、〇〇高校出身なん、おーい、田中！お前と同じ高校出身者がきてるで」
「何？」
「こんにちは。」
「ひょっとして、兄貴は△△高校で剣道してなかった？」
「なんでしってるの？」
「同級生じゃ。」
「あ、そうですか。」
「弓道部って経験者少ないし、大学から始めても十分やっていけるから入ったら。」
「まあまあ、とりあえず二週間仮入部期間練習においでえな。」
「わかりました。月曜日から来ます。」
「おーい、山田あとはよろしく。」
「練習きてくるん？私たちは土曜日しか一緒に練習できないけどがんばってね。」
「ちょっとチャレンジしてみます。」
と軽い気持ちで彼は弓道部に仮入部し、弓道を始めた。
　一人で生活を始めて、自炊生活も落ち着き、大学での学科の友だちとも話をするようになってきた。
部活も一カ月間、体力づくりの基礎練習。毎日、充実してたのしく生活していた。その中で、初めての合宿が行われた。これは、新入部員のための合宿で、やっと本格的な練習に入るために行われた。先輩にいろいろと部活以外のことも教わった。

お誘い。

　そんなある日、クラブ紹介で声をかけてきた山田先輩から、
「今日、暇？」
「まあ、暇です。」
「ご飯どうしてるの？」
「自炊してますよ。」
「へえ～えらいね。」
「今日は、作ってる？」
「まだです。帰ってから。」
「そうなん。よかったら食べにくる？」
「いいんですか？」
「いいよ。」
「家、かわらんけど。」
「私原付やけど、ゆっくりいくから自転車でついてきて。」
「わかりました。がんばります。」
「桧垣さんもいつも一緒だから、あとでうちにくるって。」
「わかりました。」
といって、部活が終わってから、そのまま原付について、数キロの道のりを何の疑問も抱かずに先輩の家に食事にいった。
「お邪魔しま～す。」
「他に誰もいないよ。まあどこでも座って。」
先輩のきれいな部屋に、初めて上がったかれは、結構緊張していた。とりあえず、こたつ机の前に適当に座った。
「テレビでも見る？」
「はい。」
「今から、ご飯炊くから見といてね。」
「はい。」
キッチンから米の研ぐ音が聞こえてきた。ちらちらのキッチンの先輩を見たり、テレビの方を見たりと落ち着いていなかった。

ほどなく。

「ピンポーン」
「あ、来た」
ほどなくして、桧垣先輩がやってきた。
「こんにちは」
「さっきまで一緒に練習してたじゃん。」
「まあ、そうですが。」
「なあなあ、神戸出身なんやろ」
「都会人はいいな。」
「私、山口の田舎だから。地下鉄とか乗ったことないし。」
・・・・・・
しばらく、出身地の話などで盛り上がった。
山田先輩が料理している最中に、桧垣先輩が、
「実はね、彼女、昨日あなたを食事に誘うために一生懸命に掃除してたのよ。私も手伝わされたのよ。」
「何いってるの！！普段より少し余分に掃除しただけよ。」
「うそうそ。めっちゃ手伝わされたのよ。」
彼は、リアクションに困っていた。
「はいはい、ご飯出来たよ。ご飯はあるから、おわかりしてね。」
　３人で楽しく食事をしながら、大学生活の話や、部活の先輩の話などいろいろ聞かせてもらった。
彼は、ほとんど一方的に話を聞くだけだった。

帰り。

時間はすぐに過ぎていった。１１時ごろ、桧垣先輩は、彼氏がそろそろ帰ってくるからと言って家を後にしようとしたので、彼は、一緒に帰ろうとした。
「まだ、大丈夫でしょ」
「え、まあ。」
「もう少し話してから。」
「はい、わかりました。」
先輩の言うことは絶対でした。
　それから、二人きりっでまた、２時間ぐらいとなりに座っていろいろな話をした。
彼は、この時どうしたらいいかは、全く知らなかった。
お互い眠たくなったので、その日は帰ることにした。
彼は、疲れて次の日は昼まで寝ていた。

それから。

　次の週。
「先輩、この間はお食事ありがとうございます。」
「ううん、いいよ。また、一緒に食べよね。」
「今度、うちに遊びに行ってもいい？」
そう先輩の言うことに絶対服従。
「あ、もちろんいいですよ。何もありませんが。」
「いいよ、何もしなくても。何か買っていくから。お湯ぐらい沸かせるやろ。」
「はい、大丈夫です。」
今度は、自転車に原付がついてきた。
「お邪魔しま～す。」
「誰もいないよ。」
「一応、挨拶で。」
「え、結構広いじゃん。いいなあ。」
「でも古いし、隣の声少し聞こえるし。まあ、適当にすわっててジュース入れてくるわ。」
「ありがとう。」
彼女は、適当に部屋を物色していた。
「あ、ありがとう。こんな音楽きくんだ。」
「聞いてみる？」
「うん。聞く聞く。」
もう、返事の仕方が先輩でなくなっていた。
それでも、彼は自分に好かれているという自身は全くなかった。
むしろ、この後どうする？という状態でしかなかった。
話をしている間になんとなく二人の距離が近くなって、いつの間にか部屋に二人並んで座っていた。
肩が触れ合い、なぜか手をつないでいた。
彼の心の中は、完全に舞い上がっていた。この後に及んでどうするか、必死で無い知識で考えた。
彼女は、先輩だった。まさに、これに彼は助けられた。
彼女は、目をつぶってこちらに向いていた。
二人は、自然に引き寄せられたのでした。
これが、大学最初の体験だった。彼は、かなりドキドキした。

付き合いはじめて。

　彼は、先輩彼女とたのしい時をすごしていた。
お互いの家を行き来したり、一緒にショッピングや公園デートなどして週末がたのしみになっていた。
しかし、そう長続きしなかった。
先輩にバレ。
「うちのサークル恋愛禁止やで。」
「え、そうなんですか。」
彼の心の中では、確かあの先輩とあの先輩が付き合っていると聞いたのに。。。
などと思いながら、二人は、目立たないようにしていた。
そう、ある日突然、彼女から
「もう、付き合えない。」
「なんで。」
「だって。。。。」
はっきりと理由がわからないまま。別れることになった。
彼は、涙は流さなかったが、心の中で泣いた。

次へのステップ

　大学にきて、はじめて振られた。
たのしいキャンパスライフのはずが。。。という思いが。。。なかなか消えなかった。
サークル活動に打ち込み。勉強は、あまりしなかった。
同期の友だちとグループで遊びにいったり、食事に行ったりすることが増えてきた。
あれから、ひと月が過ぎた。
　彼は、あたらしい恋をした。

　それは、同じサークル仲間の一人で、さゆりちゃん。
彼女は、隣県の出身で、身長が１６５ｃｍもある女の子でした。彼は、１７５ｃｍだったので、ほとんどかわらなかった。
サークルが終わったあとに、話したり、皆で一緒に遊ぶ友だちの一人でしかなかった。
もちろん、彼らは、彼が以前につきあっていた先輩彼女のことをしっている。
なので、じっとしていても何の進展もなかった。
しかし、彼は、まだ、近づく方法を知らなかった。
普通に話す以外なにもできなかった。ここでも、いろいろ考えたがなかなか実行できなかった。
ラッキーなことに近づく機会が、出来た。それは、お祭りに大勢で出かけたときに、お酒の力を借りたのであった。
「ねえ、大丈夫？飲みすぎてない？」
「少し、酔ったみたい。」
「じゃあ、家まで送ろうか？」
「うーん。。。」
一緒に来てた女の子が
「送ってもらいなよ。私まだ飲みに行くから。」
「じゃあ。わかった。」
「それじゃ、俺ちょっと家まで送ってくるからかえるわな。」
「了解。」（みんな酔っ払い）
そこで、彼は思い切って腕をとって一緒に歩き始めた。

歩き始めた。

　好きな彼女の腕をとり、歩き始めた彼。
「大丈夫？」
「うん、大丈夫。」
「家、反対方向なのにごめんね。」
「気にしなくてもいいよ。なんかあったら責任感じるし。」
「ありがとう。」
少し世間話をしたあと、彼女から
「彼女とは、どうなったの？」
「もう、だいぶ前におわった。ふられてん。」
「そうなの。」
「だから、今彼女募集中。」
「もてそうだから、すぐ出来るよ。」
「そんなことないよ。」
「好きな人はいるの？」
「まあ、一応。」
彼は、心の中では「あなたです。」と叫んでいた。
「そうなんだ。」
「ねえ、誰？」
「今は、言えない。」
「なんだ、おもしろくない。」
「ほっといて」
と、本音と言葉がずれていったのでした。
家が近づいてきた。
「じゃあ、ここまでで大丈夫。」
「わかった。また明日サークルで。」
「うん。今度、このお礼するね。」
「覚えてたらでいいよ。」
「じゃあバイバイ。」
「バイバイ」
この日は、このまま別れた。

　あいかわらず、彼はサークル活動に力を入れていた。ほぼ毎日練習し、腕を磨いていた。
一方、彼女は、普通に練習日だけ練習して自由練習はあまりしていなかった。
あれ以来、特に近づくこともなく、普段通りの生活が続いていた。
でも、彼は、それとなく彼女のことを気にかけ続けていた。
いつの間にかサークルの練習日は、彼女に会うのを楽しみにしていた。
でも、特に一緒に練習するわけでもなく。ご飯を食べに行くわけでもなく。
あの日のお礼があったわけでもなかったし、それを期待も別にしていなかった。
　ある日、彼女が風邪をひいたらしく、サークルを休んだ。
チャンスと思った彼は、彼女の友だちに連絡をとり、お見舞いに一緒に行かないか聞いた。
すると、友だちは、本当は寝てるから嫌だけど、私と一緒だったら来てもいいって。
「よし。」とこころの中でさけんだ。
女友達と一緒に自転車でお見舞いの品を買いにいって、いざ彼女の家に。。
「ピンポーン」
「はーい」
「ちょっと待っててね」と言って。
彼女の友達だけが中に入っていった。
数分後、
「いいよ」
お部屋に入っていった。